鬼百合

『新壘』
68-1号

何ごともなき日常の虚しさにトマトは色づかぬまま太
りゆく

平穩と言ふもの足りなし尖らせては又折り畳む切出
しナイフ

意念にも価値なきもののみ抱へ来て引き返さむ距離
にふたつの海鳴り

つみゆく闇に残されし鬼百合のひときは鋭く孤立を
掲ぐ

ゆるびたる指よりそれし鉛筆を探さむと炬燵板まで
剥がしぬ

冬の丘

『新壑』2
68-2号

移り来て未だ定まらぬ方位感たびたびにして園につ
まづく

やうやくに厨への手順の整ひて平穩と言ふを器に盛り
ぬ

みづからの立てたる定義にもとづけば老いの自立のぬき
さしならぬ

秋の愁ひ葡萄ひと房ほどの量ならむ水に洗はば拭はる
る念ひ

吹く風に従ひゆかば冬の丘枯れたるものみに耀る夕
陽

雪・雪

『新壑』3
68-3号

未だわれに明日ある兆しに停つ丘よ夕陽は枯れたる
もののみ耀ふ

合わせゆく裡なる念ひは意志の外冬ただ中のかなし
き妥協

うたた寝の夢にはあらじしんしんと降りくるものの巖
かなる 白

降る雨の雪と変りゆく坂道に惨憺と朱の山茶花零る
る

ガラス戸に額押しあて視る雪は無為なる今日の冷め
たき結末

老いの位置

『新壘』
68-4号

をみなゆゑの業とや言はむ老いてなほ厨べよりほかな
きわれの位置

朝夕に挨拶交はす猫とゐて他人行儀の崩せざる家族
ら

着膨れて緩慢となる身のこなし仮りの世と云ふ冬の不
自由

どの愛にも醒めて寂しき悔となる求めたるは孤独か
も知れず

彩褪せて散りしく山茶花踏みながら減びゆく身のか
ぎりなき痛み

冬の丘 『新壑』5
68-5号

枯れ丘に佇む独りを吹き抜けて途方もあらず風の行
方よ

冬枯れのひもじさならぬ生ゴミを漁る鴉に哀れもて憎
む

頼むことの増えゆく日常に未来とふ言葉切なき空回
りして

母よりも甘く優しく豆を煮る気弱な姉の小さき泣
き黒子

黄の水仙

『新壑』68-6号

累ねきし急情なる瞳につんつんと水仙の乱れなき横列

ゆきづまるわが詩歌に灯すごと弥生みそかの夜の黄水
仙

浅みどり野にも山にも季が来てこころ病む軀の叙情と
なさむ

豊かさに少年らの悪はびこりてさしのぶる掌の急がね
ばならぬ

老いのレットテルは自ら剥がすものとさしづめ厨にきびき
びとまっ

皓き著莪

『新墾』
68-7号

鉄柵の錆を超へつつ隣家との絆をとりもち咲く著莪の
皓

まっからにおのづと開く扉の前われは悄然と腕垂らすの
み

野苺の摘み採りし手の火照りきて帰らむ径の夕映への
空

追ひつめて玻璃戸に蠅を叩き打ち殺生とふは斯くも
疲るる

夕ぐれはとり分け寂し苧環は遠き古代のむらさきの
彩

野の葳菜

『新壑』
68-8号

ぐ 花言葉燃ゆる念ひの山つゞ地震鎮まりていよよ華や

む 地震のあと震へる脚に立ちながら朝のパセリを漸く刻

く 夕映えを見つくしてなほ人生の折り合ひ未だつけがた
く 立つ

もの 今日の悔い闇に流しぬ無形とは冥く重たく身を奪ふ

の花 わが死後を飾るにふさはし葳菜は野をいちめんの蒼白

花 『新壑』
68-9号

ひと生とは凡そ容ることならぬ真摯に白き 菜の皓 蕨

艶麗に咲くゆゑ妬まし紅芙蓉倚りてはかなく身は虚
しまむ

今日の藍明日に恃みてみづみづと遠き眠りのよるの紫
陽花

わが齡とくに重たく山梔子の花散るまでの罪とも思ふ

夕闇は山梔子の花蝶に似せ舞ひを知らねば香りを放
つ

吾がよはひとときは重たき荷とならむ鞅鞆に揺すれば
軽きものを

向き合へる鏡の中の己にて枯れゆくもののさらなる哀
しみ

靄中の朦朧と替るシグナルに含みもつ言葉きくごとく
渉る

曝らしるる身の危ふさや道々に素手もて捨ふガラスの
破片

揉み洗ふ掌のなか小さきストッキング戦後つよくなり
にしひとつ

ながき梅雨

『新壑』
68-11号

つゆの鬱ひきずりながら逝く夏よ南瓜真つ二つの朝の切れ味

帰りゆく方向を困ごし掻きくもるよるべなき街にくづく孤り

かすか保つ自負心ゆゑのながき苦表われを捨てにゆく川の綻び

幸せと不幸せとの均衡の測りがたくして切なき保身

老ゆるのみのか織き喉にのみ下す巨峰といふ名の黒きつぶら実

詩の秋 『新壑』
68-12号

つひにして選ばれる瓶のあらずして野菊にふさふガラス
のコップ

ひとむらの穂すすきのなか見え隠れまぼろしの母訥々
と顛つ

しろじろと秋なる風の渡りゆく侵されずある平穩いつ
まで

ゆるびたる蛇口より洩るるみづの音詠はむ秋の字余り
の詩

人の世に生きて悲慘の繰り返しされど再び人間を希
ふや